豪雨

笹沢左保

Saho Sasazawa

夕暮れ

三沢左保

講談社ノベルス
KODANSHA NOVELS

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎
本文イラストレーション＝宇野亜喜良

夕暮れ

一九九一年八月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—笹沢左保 © 1991 SAHO SASAZAWA Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二-一二-二一 郵便番号一一二-〇一 編集部〇三-五三九五-三五〇六 販売部〇三-五三九五-三六二六 製作部〇三-五三九五-三六一五

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181564-4 (文三)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　思い出す顔――7
第二章　切断した腕――39
第三章　追われる足――86
第四章　震動する頭――135
第五章　涙のない目――183

第一章　思い出す顔

1

十一月二十日、夜十時。

場所は、六本木。このあたりも一般に六本木と呼ばれているが、正しくは東京港区の麻布台三丁目ということになる。

飯倉片町の交差点の東側の路上に、五人のギャルが屯している。あるいは、女子高校生かもしれない。化粧っ気がなくても、顔が綺麗に見える。若さのせいだろう。

だが、着ているものが、どこか野暮ったい。安物というのではなく、着こなしが悪いのだ。その代わり、口は達者である。とにかく、よく喋る。五人が沈黙する瞬間というものが、まったくなかった。

五人のうちの二人は、ひどく興奮していた。声も大きいし、身ぶり手ぶりがオーバーだった。あとの三人は待ち合わせの場所へ、やや遅れて到着したらしい。それで先に来ていた二人が自分たちの目撃談を、三人の友だちに話して聞かせているのである。

「孫悟空タクシーよ」

「うん、知っている」

「車体が黄色と白で、マンガみたいな孫悟空が描いてあるんだよね」

「屋根のうえの明かりさ」

「あれ、防犯灯ってんじゃないの」

「そこには、雲の絵が描いてある」

「あの雲、何だか知ってるか」

「孫悟空が乗って、突っ走る雲でしょ」

「だから、その雲の名前」
「難しい字を、書くんだよね」
「觔斗雲よ」
「頭いい」
「どうせ、マンガで覚えたのよ」
「お正月のキントンみたい」
「結構、評判のいいタクシーなのよね」
「乗車拒否はしない、お近くでもどうぞって、ステッカーが貼ってあるもん」
「そんなステッカー、ほかのタクシーにだってあるよ」
「孫悟空タクシーは、そのとおり絶対に実行するんじゃない？　だから、いま人気があるのよね」
「でもさ、その孫悟空タクシーがどうしたのよ」
「話が、途中じゃん」
「ついさっき、孫悟空タクシーがそこに停まったの」
「タクシーが停まるなんて、珍しくも何ともないじゃん」
「いいから、聞きなさいよ」
「とたんに、二人のお客が車から飛び出して来たわ」
「何かあったの」
「そうしたら運転手も車を降りて、お客のあとを追ったの」
「わかった。無賃乗車だったんだ」
「料金を払わないで、逃げたのね」
「そうだったみたい」
「いまどき、そんな人っているのかな」
「酔っぱらいでしょ」
「外人よ」
「外人……！」
「白人と黒人、そろって大男」
「アメリカ人？」

「わかんないわよ。なんかペラペラ大声で言ってたけど、何語だったんだか……」
「英語かどうかぐらいは、あんただってわかるでしょ」
「全然」
「わたしがいたら、よかったんだ」
「英語が、パーのくせに……」
「ギャルって、知っているもの」
「ガールをナマった言葉なんて、英語のうちにはいらないよ」
「それで運転手さん、逃げた外人に追いついたの」
「すぐ、追いついたわ。そのあとが、ものすごかったのよ」
「ねえ、カッコよかったよねえ」
「どうしたのよ」
「外人二人は、運転手に殴りかかろうとしたの。ボクシングみたいに、構えちゃってさ。わたしたち、悲鳴を上げそうになったもんね」
「そうしたら、運転手の強いの何のって、白人の腕をかかえて投げ飛ばしたわ。柔道の背負い投げっていうのかな、白人は地面に叩きつけられたよ」
「黒人のほうも、足を払われてさ。いったん宙に浮いてから、歩道にドスーンだったわね」
「タクシーの料金は……」
「白人のほうが寝転がったままで、あわててお金を差し出したの」
「運転手は何枚かお札を抜いて、残ったお金をそっくり白人に返して、さっさと車に乗り込んで、何の騒ぎもなかったみたいにスーッと走っていっちゃったわ」
「映画のシーンみたいで、すごくカッコよかったな」
「ほんと、痺れたわ」
「ねえ、若い運転手だったの」

「若くもないし、二枚目でもないね」
「だけど、頼もしかった」
「年は、三十七か八ぐらい」
「がっかり」
「だけど、いい身体していたな。背が高くて、胸に厚みがあって……」
「頭が海坊主みたいに坊主刈りで、それも個性的だったね」
「ますます、がっかりね」
「茶色っぽいレンズのサングラスをかけていたんだけど、あれがまたよく似合っていたな」
「ねえ、海坊主って何なのよ」
「まったく、何も知らないんだから……」
「テリー・サバラスに、感じが似ていたわね」
「テリー・サバラスって……」
「それも、知らないの」
「うん」
「わたし、知ってる。『刑事コジャック』、見たもん」
「さあ、行こう」
「二十くらいのテリー・サバラスを、捜さなくっちゃね」
「馬鹿みたい、そんなの気持ち悪いよ」
五人のギャルたちは飯倉片町の交差点を、六本木五丁目のほうへ渡っていった。その賑やかな話し声と笑いは、いつまでも消えなかった。話題は、某歌手のコンサートへ行くの行かないのといったことに、変わっている。
すでに彼女たちは、テリー・サバラスに似ている孫悟空タクシーの運転手のことを、忘れきっていた。
そのころ、テリー・サバラスこと夜明日出夫が運転する孫悟空タクシーは、首都高速を走っていた。谷町インターをすぎて、渋谷線へはいったところで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある。

後部座席の客は男と女で、相変わらずチューチューやっている。赤羽橋の近くで乗せた客で、行き先は渋谷であった。首都高速に乗るに決まっているし、そこまでは別にいやな客ではなかった。

しかし、芝公園から高速へはいってからが、まことによろしくない。車の流れがいいと見るや、客の男女は待っていたとばかりに抱き合ったのだ。

唇を重ねると、そのまま重ねっぱなしであった。瞬時も、離れない。音は聞こえないが、チューチューをずっと持続させている。よく息苦しくならないものだと、夜明日出夫は感心する。

何も迷惑にはならないから、どうぞご勝手にである。夜明日出夫は、ルームミラーに映してみようなどと妙な気は起こさない。ただ近ごろの男と女はどうかしているぜと、情けないような気持ちにはさせられる。

平凡なサラリーマンと、普通のOLというカップルだった。酔ってもいなかった。それなのに、羞恥心とか慎しみとかを持ち合わせていない。

いまここでこうしたいという欲望が働くと、いっさい自制できなくなるのだろうか。傍目も気にしないし、恥も外聞もあったものではない。

特に近ごろは、女のほうにその傾向が強い。実に、堂々としている。図太いというか傍若無人というか、とにかく積極的な女が多くなった。

それに女はいったん車内での濡れ場に熱中すると、もう頭の中が空っぽになってしまうらしい。運転手の存在など、完全無視である。

機械の一部に見なされているのだと思うと、夜明日出夫もわが身が哀れになる。だからといって、文句を言うわけにはいかない。タクシーは人間運搬業なのだと、運転手のほうが割り切るしかなかった。

しかし、抱き合ってチューチューをしているだけ

の男女ならば、まだ笑ってすませるというものである。ひどいのはタクシーの中で、本番を始める男と女であった。

そういう連中がいるとは、運転手仲間から話として聞いていた。経験した運転手の解説によると、そうした男女はセックスをする場所がなかったり、ホテル代を節約しているのではないという。

タクシーという小さな密室の中に、運転手なる第三者が一緒にいる。そのような環境でセックスをすることに、強烈な刺激を感じるのだそうである。

セックスをするのに、すぐ近くで誰かに見られていないと燃えない、という変態性の男女と同じようなものだった。そのうえ並走するトラックの運転席から、タクシーの中を覗かれる可能性もある。

これがまた、強い刺激を呼ぶスリルになるらしい。そういうことに魅せられて、いつしか病みつきになる。つまり、普通では味わえない興奮と刺激的なセックスを求めて、わざわざタクシーの中で始めるのだという。

一種の異常者だろう——。

夜明日出夫は、そう簡単に片付けた。世にも珍しいことであり、自分にはかかわりはないと思ったからであった。ところが、そうはいかなかった。

タクシーの運転手歴がまだ三年にもなっていないというのに、夜明日出夫は非常に珍しい体験を余儀なくされたのだった。十日ばかり前の夜中のことである。夜明日出夫は銀座で、男女の客を乗せた。

男は四十代半ばの紳士で、服装と所持品を世界のブランド品で固めているというタイプだった。女のほうも、高級品で着飾ったマネキンのような美人に見えた。

銀座の高級クラブのホステスとその客だろうと、夜明日出夫にはひと目でわかった。それも、ただの客とホステスではない。双方の馴れ馴れしい態度か

ら、特別な仲にある男女と察しがつく。
それでも女は男を、専務さんと呼んでいた。タクシーが簡単につかまる遅い時間まで、営業を終えた高級クラブの店内で飲んでいたのだろう。男も女も、酔っぱらわない程度に酔っている。
だいたい、この専務さんのような人種は、時間をつぶしてまでタクシーに乗ろうとはしない。運転手付きの会社の車を待たせておくか、ハイヤーを呼ぶかする。
どうして専務さんは、夜中まで粘っていてタクシーに乗ったのか。会社の車にも乗れないし、ハイヤーも呼べない名ばかりの専務なのか。夜明日出夫にしても最初、ふとそう思ったのであった。
だが、あとになってわかったことだが、それなりの事情があったのだ。ただ女の子を送っていくだけでなければ、運転手付きの会社の車は使えない。ハイヤーにしても、専務というのがどこの何者であるか、運転手には知れることになる。
そうなっては不都合な目的があったので、専務さんたちはタクシーを選んだのである。タクシーの運転手ならば、客の正体を知ることはできない。そして、同じ運転手と再会するという偶然も、まずはあり得ないだろう。
「呉服橋へ、向かってくれますか」
専務さんが、夜明日出夫に言った。
曖昧(あいまい)な行き先であったが、もちろん客の指示には従わなければならない。呉服橋へ車を走らせながら夜明日出夫は、女が男にぴったりと寄り添っているのに気がついた。だが、そんなのは珍しいことではないので、夜明日出夫は何とも思わなかった。
唇を重ねながら、男は女の胸のふくらみに触れている。女はのけぞって背筋を湾曲させ、微妙な動きで腰を揺すっていた。そのうちに女は、両足を男の膝(ひざ)のうえに置いた。太腿(ふとももも)を開き加減にして、女はス

カートの奥を愛撫してくれと男を誘う。
男は、それに応じる。男の手が深く、女のスカートの中に消える。女は唇を離して、身体をビクンとさせる。女はかじりつくように、男の首に両腕を巻きつける。
それでも夜明日出夫は、こいつはかなり濃厚だと感心したくらいだった。
「呉服橋から、高速にはいってください。都心環状線を、内回りで……」
またしても、専務さんがおかしな注文をつけた。
「出るのは、どこなんです」
夜明日出夫は訊いた。
「いや、環状線をひと回りしてもらいたいんです」
専務さんは、うわずった声で答えた。
そのとき女が、あっと甘い声を漏らした。それで夜明日出夫は、それ以上の質問をやめた。専務さんも、黙り込んだ。高速の都心環状線をひと回りするとは、不思議な深夜のドライブもあるものだと、夜明日出夫は首をひねりたくなった。
夜明日出夫はなおも、男女の目的を理解できずにいたのだった。高速だけを走り続けるのだから、タクシーとしては効率のいい利益になる。夜明日出夫は、そんな計算しかしていなかった。
呉服橋から、都心環状線へはいった。神田橋、代官町と走った。その声が、忙しくなっている。身を揉むようにして、女は少しずつ上体を起こしにかかる。
そうなって初めて、夜明日出夫にも男女がひとつの行為に移ろうとしていることが察知できた。環状線をひと回りする目的が何かも、わかったのだった。
運転手仲間から聞いた話と、同じことを現実に体験させられる。そういう運命も含めたすべてに、ただ夜明日出夫はあきれるばかりであった。

2

霞が関を、通過した。

女は、専務さんの膝にまたがった。ちゃんと靴を脱いでいるので、シートが汚れると文句は言えなかった。夜明日出夫は傍観者でいて、あとは勝手にさせておこうと覚悟を固めた。

専務さんと女は、向き合う格好になった。運転席を背にした女は、そのための準備かどうか知らないが、コートを羽織っていた。コートの向こう側で、専務さんと女は何やらゴソゴソやっている。

邪魔になるものから、下半身を解放しているらしい。コートに遮られて、まくれたスカートや女の尻が見えたりしないのが、夜明にとってせめてもの救いだった。女の喘ぎが、激しくなった。

女の両足が完全に、二つに折れ曲がった。腰を沈めたということである。同時に、悲鳴に近い女の声が、長く尾を引いた。専務さんと女は、結合を果したのであった。

ついにやってくれたぜと、夜明は首をすくめた。別に刺激されるようなことはなく、むしろ驚きのほうが強烈だった。走るタクシーの中であり、ここにはおれもいるというのに、いったいどんな神経をしているんだろうと、夜明はあっけにとられる。

こういうご時勢なんだし、男女関係の乱れもここまで来たかと、そう解釈するほかはなかった。一種の異常性と考えれば、腹が立つこともない。馬鹿らしいと思うし、あまり愉快ではないという程度で抑えて、あとは冷静でいるしかなかった。

飯倉をすぎたところで、女の上下動が荒々しくなった。女ひとりでリードする体位だし、専務さんはロボットになりきっている。息を弾ませているのも女だけだし、まるでひとり相撲のようであった。

それでも殺しているつもりなのだろうが、やはり女の声は夜明の耳にも達する。身体の動きに激しさが加わったので、コートが女の腰のあたりに滑り落ちた。

夜明は男女の姿が直接、目に映らないように、ルームミラーの角度を変えた。

芝公園、汐留、銀座、京橋、宝町とすぎたが、後ろでは乱れに乱れながらまだ続いている。江戸橋にさしかかったとき、やっとのことで女が専務さんにしがみついた。

女は口の中へハンカチを押し込んだみたいだが、それでも絞り出されるような歓喜の絶叫が聞こえた。三十秒ほどは静かにしていたが、男と女は間もなく後始末に取りかかった。

それがすむと、女は再びコートを羽織って、専務さんの膝のうえから座席へ尻を移した。女は靴もはいて、そのままぐったりとなった。専務さんはズボンの皺を、気にしたりしている。

呉服橋は、すでに通過していた。これで都心環状線を一周したわけだが、車を停めることはできない。孫悟空タクシーは二周目にはいって、なおも疾走を続けている。

「外苑で、出てください」

何事もなかったように、落ち着いた声で専務さんが言った。

三宅坂インターで都心環状線に別れを告げ、新宿線を直進することになる。外苑で、首都高速を出た。女のマンションや専務さんの自宅まで、夜明のタクシーに乗っていくはずはないだろう。

そう思っていたら果たして、一般道路へ出たとたんに停車の指示があった。専務さんと女は、別のタクシーに乗り替えなければならないのだ。

専務さんは料金のほかに、一万円のチップをよこした。専務さんと女は、孫悟空タクシーを降りた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com